

[実践女子大学]

異なる世代をつなぐ「多世代交流カルタ」

須賀 由紀子 実践女子大学生生活科学部教授

1 社会とつながる学び

実践女子大学では、社会とつながる学びとして社会連携プロジェクトに力を入れている。本稿では、学科の学修を活かした地域連携・教育プロジェクトとして、「多世代交流カルタ」について紹介したい。

「多世代交流カルタ」は、少子高齢・人口減少社会を背景に、異なる世代が知り合い、つながり支え合うきっかけづくりのコミュニケーション・ツールとして構想されたものである。読み札は暮らしに関わる生活科学部の学生が、その言葉に合う絵札は文学部美学美術史学科の学生や共通教育のプロジェクト型授業の受講学生などが作成する。複

数学部学科の学生が連携していることが特徴だ。これまでに、「高齢者のいろはアートカルタ」「子どものいろは見立てカルタ」「高齢者×若者のいろは相詠みカルタ」などの製品化を行っている。完成したカルタは、これからの地域社会づくりについて実践的に学ぶ、生活科学部現代生活学科の学生が、実際に地域活動の中で活用している。

2 異世代を大学生がつなぐ

それぞれの作品の特徴を簡単に紹介すると、「高齢者のいろはアートカルタ」は、若い学生が捉えた高齢者像を言葉にすることで、学生の高齢者理解、また高齢者の若者理解につなげようというものである。その絵札は絵画をコピーして作成しており、芸術鑑賞の導入としても楽しめるものになっている。

「子どものいろは見立てカルタ」は、生活科学部で幼児保育について学ぶ学生が、教育実習で触れ合った子どもの言葉をもとに作成している。地域交流の中で若い親世代と祖父母世代をつなぐツールや、大学の授業で教育実習前の学生の学修教材としても活用可能である。絵札

は、日常の身近なものを使って、読み札の子どもの世界を見立てて作成されており、見るだけでもほのぼのする。また、絵札の絵から、子どもたちに新たな読み札を作ってもらおう、という形での創作活動につなげていくことも可能だ。

「高齢者×若者のいろは 相詠みカルタ」は、高齢者の昭和の頃の思い出と、現代の若者の暮らしへの思いを重ね合わせ、双方の価値観を詠み交わすような言葉で読み札を作成したもの。絵札の絵は、カラフルな紙粘土を型抜きして制作している。地域の公民館や地域包括支援センターなどで高齢者との交流に活用して、「異なる世代の方とたくさんお話できて楽しかった」「若い人と一緒に時間が過ぎて元気がなった」など、大変好評を得ている。

3 創造する喜びを原点到

このように工夫を凝らしたカルタは、「創造する喜びを誰もが持っている」という人間観に立って、協働して作る楽しさを創発することを念頭においている。前述した様々なカルタの活動に参加した学生は、皆「このカルタを通し

て、人と関わる楽しさや面白さを知った」と語る。人と人とがつながっていく豊かさは、「多世代交流カルタ」の作成や活用に携わった若い学生達の人生観に、「何が人生で大切か」という柱をしっかりと持たせるように思われる。

和を重んじる日本文化の中で成熟してきたカルタは、小さな子どもから、年齢を重ねた高齢者まで、誰もが一緒に遊ぶことができる万能なコミュニケーション・ツールである。見知らぬ人同士でも、カルタ遊びを通じて打ち解け、異なる世代が自然に語り合い、思いをつなぐことができる。今後、このカルタというツールの力を活かして、地域と学生をつなぎ、また、地域の様々な境遇にある人の心をつなぎ、豊かな地域社会づくりと、社会のために働く力を備えた学生の教育に注力したい。



[写真] 学生が異世代交流の場を創り出す～相詠みカルタ活用風景～

[松山大学]

愛媛県立とべ動物園の魅力発信

—思考と試行の産物「とべかるた」—

作田 良三 松山大学経営学部経営学科教授

松山大学社会人基礎力育成事業の一つとして、2021年度「愛媛県立とべ動物園の活性化に向けた商品の開発」(Zoo Project)に11名の学生が参加し、「とべかるた」を商品化した。

一般的に動物園は癒やしと憩いの場と捉えられがちだが、都市公園法では「教養施設」に位置づけられており、各地域の貴重な教育文化資源である。だが、愛媛県立とべ動物園は1988年の開園以降、来園者数が減少傾向にある。これは動物園だけでなく地域にとっての課題でもある。

私ごとべ動物園とかかわりを持ち始めたのは開園30周年となる2018年の時である。「ストレス社会」と「人材育成・人間形

成」をキーワードとして活動していた私のゼミにおいて、「癒やし」と「教養」の2つの側面を担う動物園に注目し、連携協力を持ち掛けたのがきっかけである。2018年は「日めぐりカレンダー」、コロナ禍の2020年には「マスクケース」をそれぞれゼミ活動として制作してきたが、それを全学に広げ、展開したのが2021年の本プロジェクトである。

このプロジェクトでは、学生が主体となって商品の企画から練り上げていくのだが、最終的に「とべかるた」の制作に行きつくとは全く予想できなかった。開発に至るまでは思索と試行の連続であった。学生たちが直面した課題の一つに、コロナ禍という不測の事態があった。プロジェクト開始直後に動物園が休園となり、なかなかフィールドワークができない状況となった。休園が明けても、園内でのアンケート調査が来園者との接触を伴うため、施設管理者側から許可を得られなかった。思考の末、一定間隔離れて、来園者に質問項目が表示されたタブレットを提示し、回答を聞き取る形にするほか、スマートフォンなどにQRコードを読み込んでもらい、帰宅後にGoogle Formsで回答できるようにするなどの方法を提案し、許可を得る

ことができた。

この来園者調査の結果もふまえ、多種多様な動物の特徴を楽しく理解できる「かるた」が最終候補となったのだが、学生の模索は続いた。「デジタル社会の今日、古典的・伝統的な『かるた』という遊び方だけの商品で、購買意欲を刺激できるだろうか?」、「知育的な要素は盛り込めな
いか?」、「ゲーム性を高める工夫はできないか?」等、構成について議論を交わし試行を重ねた。

学生たちは主体的に、だが独善的にならぬよう動物園スタッフや制作業者とも情報交換しながら、活動を進めた。「このアイデアが、動物園や地域、商品購入者にとってどのような意義を持つのか」と絶えず省みながら。

そのほか、読み札やイラストの作成にあたっては、各動物の特徴を伝える工夫に努めたが、「何気なく使っている表現であっても動物福祉の観点から適切ではない」と動物園スタッフから教わることもあった。商品開発を通じて、学生たちの動物への理解を深めることもできた。

地域には、さまざまな「価値」をもった「素材」があふれている。動物園もその一つであり、「かるた」はその魅力の発信に効果的なアイテムと言える。商品完売が目標だった

たわけではないが、それも学生の達成感につながった。

松山大学は地域に根差した大学であり、地域の発展に貢献しうる人材を育成している。学生が地域とのつながりを実感し、地域の中で学ぶことのできる機会を今後も支援したいと考える。



[写真]動物園でのプレゼンテーション(対面とZoomのハイブリッド型)の様子

[天理大学]

「奈良まほろばかるた」を通じて生まれた 異文化交流の輪・地域とのつながり

天理大学広報・社会連携課

2018年12月7日、天理大学国際学部地域文化学科日本研究コースの授業「ナラロジー概論」(担当：住原則也国際学部教授)の受講生である留学生18名が、天理市立丹波市小学校の4年生36名と「奈良まほろばかるた」を使った交流会を実施した。(奈良まほろばかるたとは、奈良の〈誇り〉〈ナンバーワン〉に挙げられるものを読み札・絵札に表現したかるたである。読み札の裏面解説文からは奈良の歴史・文化を広く、深く学ぶことができる。)

この交流会は、留学生が日本の伝統文化の一端に触れることにより、奈良に関する知識の向上・定着と日本語学習を目的として開催された。また、小学生の

地元奈良に対する愛郷心の醸成や国際性の涵養も目的の一つであった。当日は、奈良まほろばかるたを作成したNPO法人奈良まほろばソムリエの会の方々にもご協力いただいた。

交流会では、奈良まほろばソムリエの会のスタッフが読み手と審判を務め、留学生と小学生が5、6人ずつのグループに分かれてかるた取りに興じた。札が1枚読まれるたびに歓声が上がリ、留学生と小学生が一緒になって楽しむ様子には感慨深いものがあった。参加した児童からは、「留学生と一緒にかるたをして、とても勉強になったし、楽しかったです」との感想が寄せられた。また、中国からの留学生で本学の2年生(当時)に在籍していた于靖頤うせいしんさんは次のように語った。「元気で明るい子どもたちと、中国にはないかるたで遊ぶ経験ができてとても楽しかった。日本語の勉強にもなるし、またやりたいと思った」。

好評を博したのは、参加者からだけではない。丹波市小学校長からは、次のようなコメントをいただいた。「小学校として異文化交流をしたいと思っていた時に、このような機会を得てとても喜んでいる。留学生との交流はまさに生きた学習であり、また、かるたというゲーム性のある交

流で留学生も小学生も楽しい時間を過ごすことができ、感謝している。天理大学には授業支援でも学生にお世話になっており、同じ天理市内にある学校として、これから

も交流を続け、天理市を盛り上げていきたい」。国籍、文化、世代の垣根を越えた交流を生んだだけでなく、地域と大学との連携をも深める機会となったようだ。



[写真] 交流会の様子